

## 『球陽』最新の読み下し定本の誕生

田場 由美雄

(法政大学沖縄文化研究所国内研究員)

琉球国の「正史」の一つとされる『球陽』という書物。その誕生は、今なお秘密のヴェールに包まれているが、しかしながら、「写本」が、「抄本」「稿本」「刊本」等の形で、10数種伝来し、流布してきている。今日まで流布されてきたものでは、角川版『球陽』が一般的だが、この度、名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編による上下2冊本『琉球史関係史料1・2 球陽 上・下』として完結し新たな装いで出版された。

この琉球文学大系版『球陽』は、国宝に指定されて那覇市歴史博物館に所蔵されている尚家文書の一部、「首里王府編『球陽』『球陽附巻』尚家文書」を中心に底本として構成し、「球陽研究会編『球陽』原文・読み下し編」(「角川版球陽」と略称)を適宜参照して作られている。今日、角川版を超え出る最新の読み下し定本の誕生である。

『球陽』は、今から280年程前、1745(尚敬33)年に初回(第一次)の編集が完成された、とされ、その後、記事仕次(書継)され、琉球国の開闢(伝説)から琉球国最後の王尚泰代の1876(尚泰29、明治9)年の廃藩直前に至るまでの琉球に興った「森羅万象」の歴史事象が王代紀の編年体で集録されている。その内容は正巻22巻、附巻4巻からなり、他に外巻として「遺老説伝」があり、漢文(白文)で記されている。

内外の史籍文献が渉猟され、同時代資料を収集整理し、収録記事の範囲は、王都首里・那覇から田舎、両先島におよび、国王及び王家、国公事に関する冊封・進貢貿易はもとより、唐栄(久米村)の人事、村役人の設置、下知役、検者、指揮使等の設置、間切・村の創設、移転・統廃合、地方の行政関係、諸百姓・士族の善行美談、

長寿の話、國中奇妙の類、雷落山河人家破敗の類、潮の干満不時、その他天変地異の異常自然現象など、また異国船来航の記事等々、宗教、政治、外交、経済、文化等の各方面に渉る社会歴史事象を様々網羅し、年次を追って記録され、当時の豊富な資料を今日の我々に提供してくれている。

現代的に思いつくままアトランダムに言えば、例えば五つ子誕生、阪神淡路大震災、コロナパンデミック、豚・鶏インフルエンザ等々、社会に起こる様々な出来事(世相)を写し出す「新聞」記事集成縮刷版を、時を巻き戻しながら捲るようなものだろうか。

沖縄の各市町村で編集されている市町村史誌等にも、その当該地域に関する『球陽』の記事が採られて広く活用されてきており、今では、利用頻度の高い貴重な資料でもある。各地域からの報告や、地方行政に関する記事が収録されていることが、他の正史と異なって、『球陽』が「国民史」とも言われる所以である。

これまで一般には難解で通ってきた『球陽』だが、今回の琉球文学大系版『球陽』の読み下し文には、読者が内容を理解しやすいよう懇切丁寧なルビが施され、また頭注を設けて、漢文の難語や琉球史に独特な当該時代の歴史用語の適切な解説を加えて読解の便宜をはかっている。頭注では尽くされない重要語句の説明は頭注補遺や巻末の語注で充実させ、校異注や主要引用・参考文献の提示は言うまでもなく、そして何より特筆すべきは球陽研究史上初の総索引(8000項目余)が収録されたことである。ここによりやく球陽研究のための、そして『球陽』が十全に活用できるための真の礎が据えられた、といえよう。

## 琉球文学大系版『球陽』の刊行に寄せて

山田 浩世

(沖縄県立芸術大学音楽学部准教授)

現在(\*2025年2月中旬)、やや不思議な心持ちで、奉職先の期末業務の慌ただしさの中にいる。というのも、琉球文学大系の琉球史関係史料シリーズの先頭を飾る『球陽』(上・下巻)のすべての編集が手を離れ、印刷所で刷り上がり配本されるのを待つ身になったからである。数えてみると、他の校注者とともに本格的に本書の編集作業を始めたのは、ちょうど3年くらい前であろうか。たしか前年に、麻生伸一氏から内々に相談があると連絡を受け、本球陽の校注作業に加わるようになったから、あわせると3年半くらいは『球陽』という重厚な歴史書とにらめっこしてきたことになる。

校注を引き受けた当時は、県教育委員会で同じく漢文で記された琉球王国の外交文書集『歴代宝案』(訳注本)の編纂に従事しており、ようやく全冊の刊行を終えようとしていた頃であった。振り返ってみれば『歴代宝案』編纂の蓄積を活かし、新たに刊行される『球陽』を校注することができないかと考えていたのを思い出す。とはいえ、王府が編纂した歴史書のなかでも特に多様な記事を含む『球陽』は、『歴代宝案』と似通った部分を持ちつつ、王府祭祀や儀礼、民衆の生活や地域の民俗・祭祀、天変地異など、琉球国を総覧する歴史書として、その校注は困難を伴うものであった。

また、『球陽』については、筆者自身も多くの恩恵にあずかってきた、球陽研究会の編による一書があり(『球陽』原文・読み下し編、角川書店、1974年)、どのようにすれば琉球文学大系版をよりよいものにできるかと悩んだ。作業は各部分を校注者で分担しつつであったが、ルビを付しながらより分かりやすい読み下しをすること、記事毎に詳細な頭注を掲げて記事内容をフォローすることなどを通じ、多くの読者が球陽の持つ豊かな内容を理解できるよう工夫することとした。この間、多くの方の協力を得て、度重なる刊行スケジュールの調整もありながら(その点、事務局に多大な負担をかけることとなった)、編集を終えることができた。

今回の『球陽』編集にあたっては、球陽研究会版には収録されていない内容を盛り込んだところもある。それは例えば、近く配本される下巻収録の巻21末尾にある奥書である。この部分は今回、底本とした尚家本『球陽』に記されていたもので、嘉慶21(1816)年の年紀を持つ。

(本書には)「素、扣有る無く、或いは白蟻の害、或いは朽爛の事有りて、遂に往昔の由来を失う」ことを懸念し、新たに「控書」を作った、と記す。奥書の解釈や球陽の諸本および編纂の複雑な状況については、下巻収録の田名真之氏による「解説」、また前村佳幸氏の論考(同「尚家文書『球陽』について」『沖縄文化』114号、2013年)を参照されたいが、尚育王代の記事からなる巻21(1835~47年所収)と尚泰王代の記事からなる巻22(1848~76年所収)の構成を考えれば、奇妙な奥書であろう。巻構成と王代の連動、現在に伝わる22巻仕立ての巻構成の成立、いまだ正本が確定できない『球陽』の成立過程を考えさせる貴重な記事であることから収録した。

全体の中で自ら手を入れえた部分は瑣末なものばかりであるが、今回の『球陽』刊行がこれからの沖縄研究にいくぶんでも益するものになることを願うとともに、早く刊行せねばと焦る日々から一転、上・下巻揃えて手に取れるのを楽しみに待つ学期末に、不思議な安堵と解放感を感じている。



編集作業の『球陽』校注者3名(左から田名、山田、麻生)

## 2024年度 下半期業務報告

(10月～3月)

### 【『球陽 下』編集作業について】(10月～1月)

8月下旬から池田公民館で開催された『球陽 下』の編集作業は光文堂コミュニケーションズ(沖縄印刷団地協同組合)での出張校正(9/17～9/30)を経て、索引を除く本文の校正作業は10月末で終了しました。『球陽 上』(2023年刊行)が出た時点で、波照間委員長提案の構想(『球陽』上・下2巻をまとめた索引をつける)作業が翌11月から開始されました。しかし、同索引編集作業を進めるに当たり①漢文に作字があること、②行間にルビが入ること、③インデザインの3段組み等版下に係る諸条件が障壁となり、加えて索引が8000項目に及ぶボリュームとなったため、索引チェック作業は正月休み返上で1月末までの難産となりました。このように困難を伴った附録の索引がつくことにより、今後の“琉球研究”の広い分野に大きな進化と影響を与えることが期待されています。また、読み易さが向上したことで、『球陽』がより多くの県民や読者層に親しまれることも期待できます。



沖縄印刷団地協同組合での編集作業の様子

### 【大系巻別会議相次ぎ開催】(10月～2月)

次年度以降の大系巻別会議が担当校注者を集めて、琉大サテライト事務局において、下記のとおり相次ぎ開催されました。またそれに伴い、版下組み作業も同時並行で効率的に進められるようになりました。これにより年度をまたぐ作業が可能となった恩恵は沖縄印刷団地協同組合との「覚書」(2024年7月)によるもので、版下作業前倒しの段取りが組める効果をもたらしています。

- ①『琉球演劇 上』巻別会議(10/8、12/24)開催
- ②『琉球歌謡-沖縄篇 上』巻別会議(10/22、12/21)開催
- ③『琉球漢文学 上』巻別会議(12/19)開催
- ④『混効験集・南島八重垣』巻別会議(12/25)開催

⑤『琉球歌謡-宮古篇 下』巻別会議(12/26)開催

⑥『琉球和文学 下』巻別会議(2025.2/20)開催

### 【奄美・やんばる交流推進協議会】(2025年1月30日)

昨年7月に沖縄県名護市で予定されていた標記推進協議会(「琉球文学大系」編集刊行事業報告)が台風のため延期され、2025年1月30日に市内別会場に変えて開催されました。

奄美群島とやんばる広域圏の両事務組合組織は、双方行政区分が12市町村で構成されるなど、言語や芸能文化、自然環境も含め共通項が多いことから、奄美とやんばるはこの20余年にわたり、隔年で双方当地での協議会が開催されてきました。

報告では、波照間委員長が「琉球文学大系」全体の概要について説明が行われ、渡具知編集事務局長から『琉球歌謡-奄美篇(上・下巻)』2冊の刊行を含めた校注者(町・里・先田・高橋)への調査協力等について呼びかけがありました。懇親会の席では名桜大学人間健康学部看護学科等女子学生

(9名)が自己紹介で出身地(奄美)が披露される度に約110名の客席から歓声が上がりました。同協議会への報告および奄美関係者との懇親などは今後の『琉球歌謡-奄美篇』上・下2巻編集作業にはずみがつく良い機会となりました。



奄美・やんばる広域圏推進協議会の様子

### 【『混効験集・南島八重垣』編集作業】(1月～3月)

標記編集作業は、年明けの1/6(月)から開始され、2/9(日)まで約1ヶ月強を琉大サテライト事務局での作業に充てました。2/10(月)からは場所を西原町池田公民館へ移し、編集キャンプが行われました。また、版下製作を担う光文堂コミュニケーションズ制作部との協働も粘り強く行われ、3/25(火)からは松永明氏(東京在)も加わり、協働体制(10余名)による編集作業が続きました。

なお、当初『混効験集』というタイトルでスタートしましたが、作業を進めていく中で、収録するもう一つの「南島八重垣」を追加して『混効験集・南島八重垣』としてタイトルを併記しています。

## チンダミ（申請手続き等調整）の醍醐味

浦崎 淳也（大系大学事務局）

私は2023年11月1日に地域連携研究推進課に異動し、「琉球文学大系」編集刊行事務局に配属された。配属初日はすでに「琉球文学大系」シリーズ第12巻『琉歌 中』の編集合宿が始まっていた。私自身年度途中での大系事務局への配属ということもあり、当面は大系に係る諸手続き等事務業務に取り組むことになった。本学重点事業（全35巻/14年）を刊行する「大変な部署」への配属については、正直不安しかなかった。幸いにも上司や同僚からの手助けをうけ、チームの一員として少しずつ慣れる環境を整えてもらい感謝している。

この3月まで1年半のうち、5巻（『琉歌 中』『組踊 下』『琉球和文学 上』『球陽 下』『混効験集・南島八重垣』）刊行のための諸手続き業務に携わってきた。その中で苦労したことは、各巻の口絵に掲載する写真の資料撮影許可申請手続きに時間的余裕がなく、申請先にご迷惑をかけることもあり、お詫びをすることも複数回あったことである。私が携わった申請先は「国立劇場おきなわ」をはじめ、「沖縄県立図書館」、「沖縄県立博物館・美術館」など県内9つの公共機関と「法政大学沖縄文化研究所」など県外大学の研究機関、さらに先祖由来の貴重資料を所蔵している個人の所有者など多岐にわたった。公的機関への締切直前の申請は時間との勝負であったが、編集の最終盤で新しい資料発見が発生するなど、概ね口絵最終決定は遅くなるが多かった。そのため、申請先の公共機関等関係各位にご迷惑をかけることもあり、反省の意味をこめ「早目の行動をとること」を自戒の言葉としている。しかし、掲載された口絵写真は素晴らしいものである。

『琉球和文学 上』収録作品の調査過程で所有者が新資料を保管していたことがわかり、所有者から波照間委員長に新資料が託され、教育行政団体に寄贈する橋渡しも行なわれた。162年を経て発見された新資料を見ることができたことも良い経験となった。また、渡具知編集事務局長が本島内の歌碑撮影に赴いた翌日に梅雨入りし、晴れの日に撮影ができたことなど、“運”も応援してくれていると心強く思った。

11月1日は沖縄県が定める「琉球歴史文化の日」である。偶々ではあるが、異動した日が重なり「琉球・歴史・文化」という言葉に引き寄せられていたのかと感じている。これからも琉球文学をはじめ歴史や文化、民俗に触れていくことで、「琉球文学大系」が多くの人たちの興味を引くための一助となれたら幸いである。

### 「琉球文学大系」新規関係委員の紹介及び事務局の人事異動

本事業の関係委員(校注者)に、このほど高橋一郎氏(奄美文化研究家)が新たに加わりました。また「琉球文学大系」編集刊行委員会委員に嘉納英明氏(名桜大学大学院国際文化研究科長)、平良徹也氏(大系校注者学外委員)、上原孝三氏(大系校注者学外委員)3名が新委員として加わりました。

事務局の人事異動では、大系編集事務局の浦崎淳也係長に代り諸見里安晴主任が配属され、係員の比嘉万里杏さんに代り上原万知さんが配属されました。また、琉大サテライト事務局には係員の石橋佐紀子さんに代り、新たに上原良太さん、城間瑞生さん2名が編集拠点事務局へ配属となりました。

### 「琉球文学大系」関連記事目録—2024年10月～2025年3月

・知念豊（沖縄タイムス学芸部） 琉球和文学を發刊 名桜大刊行委員会シリーズ9巻目（沖縄タイムス、2024年10月30日、日刊/16面）  
・当銘千絵（琉球新報文化部）「琉球和文学發刊」名桜大学「大系」シリーズ9巻目（琉球新報、2024年11月19日、日刊/22面）  
・琉球新報 琉球漢文学の研究者（琉球新報、2024年11月5日/22面）  
・砂川哲男 琉球文学大系 24 琉球和文学 上(月刊やいま、2024年11月18日、月刊/42、43頁)  
・大田静男 『琉球和文学』仲尾次政隆「配流日記」など（八重山毎日新聞、2024年11月20日、日刊/7面）  
・波照間永吉「おもろさうし」世に広める上（沖縄タイムス、2024年12月5日日刊/18面）  
・波照間永吉「おもろさうし」世に広める下（沖縄タイムス、2024年12月10日、日刊11面）  
・真壁朝廣（同人誌「南溟」同人）堪能な和歌と和文の融合（琉球新報、2024年12月29日、日刊16面）  
・金城潤（琉球新報東京支局）東京で琉歌巡り講演会（琉球新報、2025年3月7日、日刊/25面）  
・沖縄タイムス東京支局 琉歌の歴史を解説 波照間さん東京で講演（沖縄タイムス、2025年3月7日、日刊/20面）  
・「宮良缸之絵図」市文化財に指定（八重山毎日新聞、2025年3月26日、日刊/1面）

### 事務局だより

2019年4月開設時に入職した「名桜大学大学院国際文化研究科博士後期課程」担当教員の4名が本年度3月をもって退職となりました。それに伴い、本大系編集刊行委員会委員長の波照間永吉先生は、2025年度から「環太平洋地域文化研究所特任教授」として、専ら「琉球文学大系」編集刊行事業（監修）の全体統括を行う委員長任務を継続して行うこととなりましたのでお知らせいたします。